

# 娘の死 責任誰に

## 東京女子医大 両親「無念です」 医師無罪判決

東京女子医科大病院の心臓手術ミスをめぐる、30日に東京地裁であった判決後、無罪を言い渡された担当医と、亡くなった子供の家族が記者会見した。事故から約4年9カ月。それぞれが重い歲月を胸に、思いを語った。

二一面参照

判決の傍聴を終えた平柳明香さんの母むつ美さん(45)は「人工心臓は勝手に動かない。それを作った人、操作した人がい

る。なのに何の過失も問えないのか、無念です。明香さんが手術前に「何かあっても死ぬことはないよ」と話したのが忘れられない。「死んでしまったのに、責任を問えないのか」と、法廷でもどかしさが募ったと明かした。

父親の利明さん(55)は「頭が真っ白になった」と、主文を耳にした瞬間を振り返った。「これは、ほかの医療裁判にど

んな影響を与えるか不安だと懸念を示した。問題の手術は、中学入

学を目前に控えた3月に行われた。小柄だった娘のために

「娘に伝えられる内容ではない」。2人は、墓前に判決の報告はしないつもりだ。

## 医師「最初から確信」

「最初から無罪と思っていました。不安はなかった」。佐藤一樹医師(42)は無罪を確信していたと繰り返したが、笑顔はなかった。

判決は、人工心臓の回路のフィルターが詰まったことが死亡につながったと認定。ポンプの回転数を長時間上げすぎたことが主な原因とする東京女子医科大の調査報告書とは異なる判断を示した。

佐藤医師は「報告書は学会でも誤りだと指摘されている。起訴状はその報告書に追随したものだ」と検察側を非難。

「東京女子医科大は報告書を取り下げるか、誤りと認めるべきだ」と古巣にも批判の矢を向け

特注したセーラー服は、死後にできあがった。受け取りに行った明香さんの祖父母が店の人に「夏服はどうですか」と言われたと聞き、胸が詰まった。

「娘に伝えられる内容ではない」。2人は、墓前に判決の報告はしないつもりだ。

た。地方、明香さんや家族への思いを問われると、「自分も8歳で同じ心臓手術を受けた」と明かした。言葉を詰まらせながら「明香さん(も)不安だったと思います。亡くなったことが残念でなりません。一生忘れられない」と語った。

強調したのは、医療事故でつくる「被害者連絡会」のメンバーが病院関係者の委員会に立ち会い、それぞれのケースごとに原因を調べている。

医療事故の鑑定に当たる「医療事故調査会」の代表世話人、森功医師は取り組みについて「一定の評価はできる」と指摘。「刑事手続きで医師個人の過失責任を問うのは限界がある。それよりも医療事故が起きた際に医師の医療行為を審判するため、新たな機関をつくるべきだ」と話す。

## 医療事故問題 協議の場設置

東京女子医科大病院は安全管理体制を見直そうと、抜本的な改革に取り組んできた。昨年2月に公表された病院改革評価委員会の評価書によると、欠陥が指摘された人工心臓装置のシステムを別の方法に変更。医師らが装置の構造などを正しく理解できるようマニュアルも新たに整備した。

さらに、「隠蔽体質の払拭」を掲げ、講習会などを通じた職員の意識改革を進めてきた。

一方、医療事故を訴える患者らと話し合う機会もできた。患者とその家